

MMMT: Monday Morning Manabi Time!



MMMT: Monday Morning Manabi Time!

1. オープニング(導入)

2. ボディ(本論)

- 研修転移
- 研修評価
- OJT 等

3. クロージング(結び)

- 1) プラトン、ロックによる形式陶冶説
- 2) ソーンダイク(1901)による転移研究
- 3) フレイシュマン(1953)による企業における研修転移研究

- 1) プラトン、ロックによる形式陶冶説
- 2) ソーンダイク(1901)による転移研究
- 3) フレイシュマン(1953)による企業における研修転移研究

ソーンダイク(1901)後の形式陶冶説

遠くはプラトン、近くはロックにルーツを持つ形式陶冶説を批判したソーンダイク(1901)の実験後、多くの転移研究が行われるようになりました(例: Norsworthy, 1902; Ruediger, 1908; Judd, 1902, 1908)。その一つが、C.H.Juddジャッド(1908)です。彼は、ダーツを投げる実験を通じて、一つの場面での経験が、一般法則として、他の場面に適用されるという「一般化説 theory of transfer by generalization」を提示しました。ソーンダイクの言う同一要素ではなく、他にも適用できる一般原則を学ぶことによって、転移が起きると主張したのです。

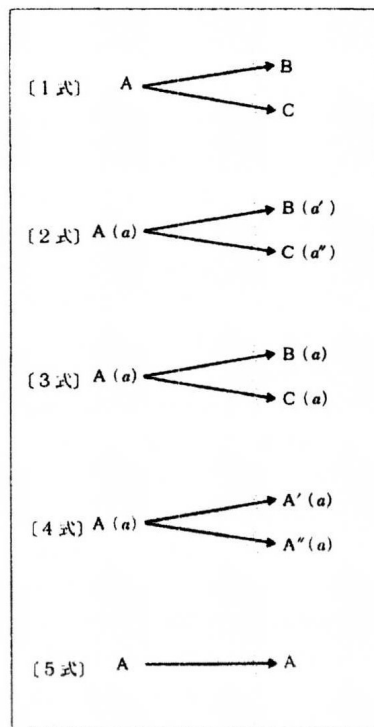
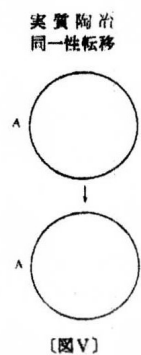
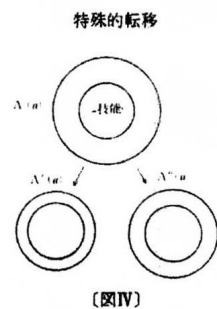
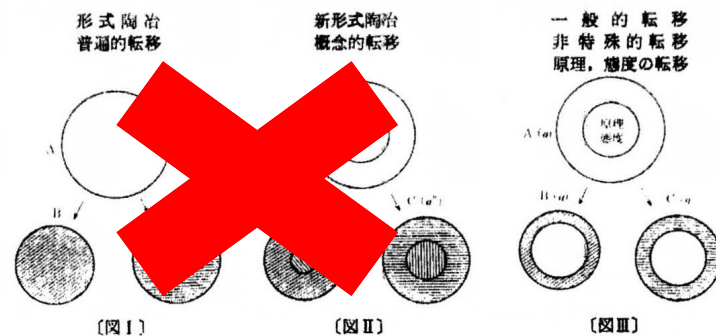
しかし、Dettermanディッターマン(1993)は、「ジャッドは、転移を立証したと言われるが、実験内容を見ると、実験群に対し、戦略を使うよう指示しており、これは転移とは言えない」と批判しています。彼は、1901年から1989年までの転移研究をレビューした結果を総括し、ソーンダイクの主張である「転移は稀」をひっくり返すものはないと述べ「形式陶冶という教育哲学を支持するエビデンスは存在しない」と断じています。ディッターマンは「人に何かを知ってもらいたいなら、そのことを教えるしかない。彼らに違うことを教えながら、本当に知ってほしいことに、彼らが気づくことを期待してはいけない。」と痛烈な言葉で、形式陶冶説を批判しています。

このような批判を受け、ソーンダイク(1901)の実験後、「形式陶冶は死んだ」とまで言われた形式陶冶説*に、灯りをともしたのが、アメリカの教育学者 Jerome Brunerブルーナー(1915-2016)でした。

*形式陶冶論は(Formale Bildung, formal discipline)は、19世紀から20世紀にかけて否定されるようになり、次第に実質陶冶論(Materiale Bildung)にかわっていきました。(河野昌晴(1982)「学習の転移についての一考察」)

「転移の間の関連性」

M M M T



佐藤(1979)は、5段階に分けて、
転移の間の関連性を図式化しました。

(佐藤三郎(1979)教育方法
吉田・長尾・柴田編 有斐閣双書.)

ソーンダイク(1901)後の形式陶冶説

遠くはプラトン、近くはロックにルーツを持つ形式陶冶説を批判したソーンダイク(1901)の実験後、多くの転移研究が行われるようになりました(例: Norsworthy, 1902; Ruediger, 1908; Judd, 1902, 1908)。その一つが、C.H.Juddジャッド(1908)です。彼は、ダーツを投げる実験を通じて、一つの場面での経験が、一般法則として、他の場面に適用されるという「一般化説 theory of transfer by generalization」を提示しました。ソーンダイクの言う同一要素ではなく、他にも適用できる一般原則を学ぶことによって、転移が起きると主張したのです。

しかし、Dettermanディッターマン(1993)は、「ジャッドは、転移を立証したと言われるが、実験内容を見ると、実験群に対し、戦略を使うよう指示しており、これは転移とは言えない」と批判しています。彼は、1901年から1989年までの転移研究をレビューした結果を総括し、ソーンダイクの主張である「転移は稀」をひっくり返すものはないと述べ「形式陶冶という教育哲学を支持するエビデンスは存在しない」と断じています。ディッターマンは「人に何かを知ってもらいたいなら、そのことを教えるしかない。彼らに違うことを教えながら、本当に知ってほしいことに、彼らが気づくことを期待してはいけない。」と痛烈な言葉で、形式陶冶説を批判しています。

このような批判を受け、ソーンダイク(1901)の実験後、「形式陶冶は死んだ」とまで言われた形式陶冶説*に、灯りをともしたのが、アメリカの教育学者 Jerome Brunerブルーナー(1915-2016)でした。

*形式陶冶論は(Formale Bildung, formal discipline)は、19世紀から20世紀にかけて否定されるようになり、次第に実質陶冶論(Materiale Bildung)にかわっていきました。(河野昌晴(1982)「学習の転移についての一考察」)

ソーンダイク(1901)後の形式陶冶説

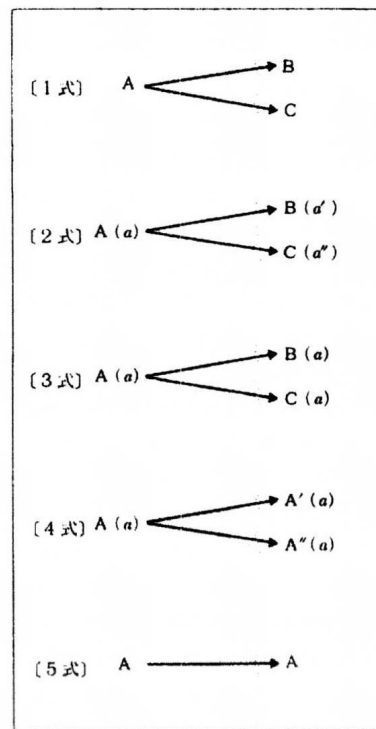
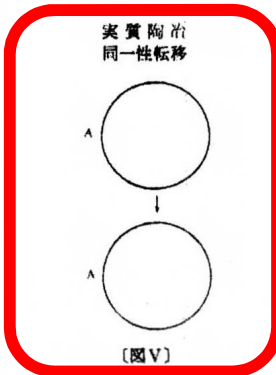
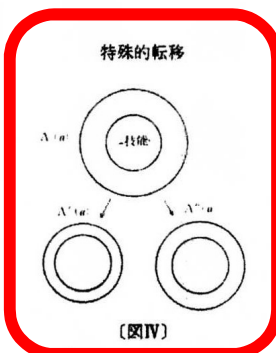
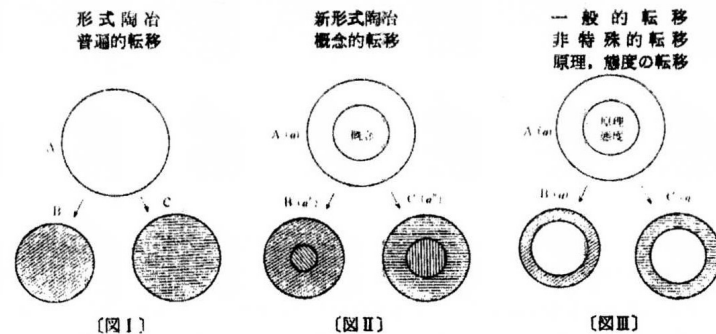
ブルナーは、書籍「The Process of Education (1961) 教育の過程」*において、「構造」概念に基づき、新しい転移の可能性を主張したのです。同書で、彼は2つの転移を区別しています。一つは、訓練の特殊的転移(Specific transfer of training)であり、これは、ソーンダイクを始めとした行動主義心理学が扱ってきた転移です。もう一つの転移は、非特殊的転移(Nonspecific transfer)という「原理や態度の転移」であり、この第二の転移が生じるのは、学習者が教科の構造を習得した時だと、ブルナーは考えました。ブルナーは、「前の学習が後の学習をより能率的にやらせる第二の方法は、便宜的に非特殊的転移、もっと正確に言えば、原理や態度の転移と呼ばれているものを通ることである」(Bruner, 1960)と述べています。

このように、1960年頃から、実質陶冶から形式陶冶への回帰現象が見られ、この二元論の見直しがされるようになりました。特殊転移(Specific transfer)説は、前から実質陶冶論と並行して認められていたのですが、もう一歩進んで、一般的転移(General transfer)の可能性も認めるようになったのです。

*ブルナーは「教育の過程(1961)」で、教科の「構造」を中心において、学習者の洞察や発見を促していく「螺旋型」のカリキュラムを提唱しました。これが「教育の現代化」運動の始まりとなったのです。
(佐伯(1998)学習の「転移」から学ぶ～転移の心理学から心理学の転移へ。『心理学と教育実践の間』佐伯・宮崎・佐藤・石黒。)

「転移の間の関連性」

M M M T



〔表Ⅰ〕

佐藤(1979)は、5段階に分けて、
転移の間の関連性を図式化しました。

(佐藤三郎(1979)教育方法
吉田・長尾・柴田編 有斐閣双書.)

ソーンダイク(1901)後の形式陶冶説

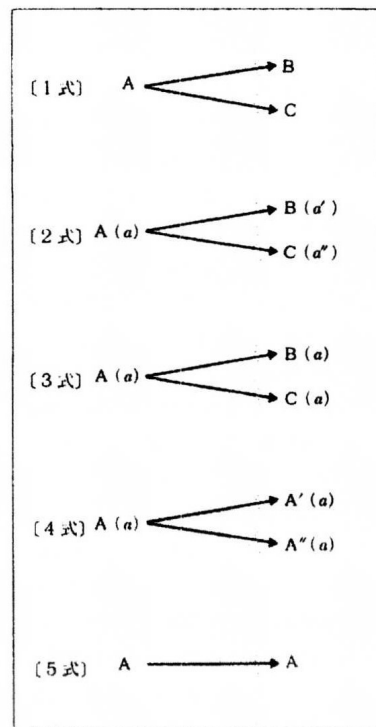
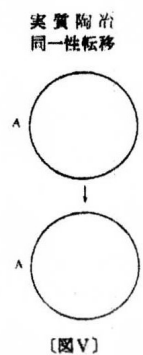
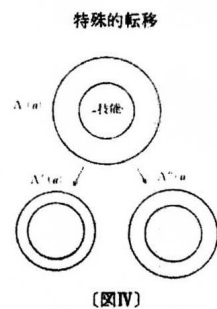
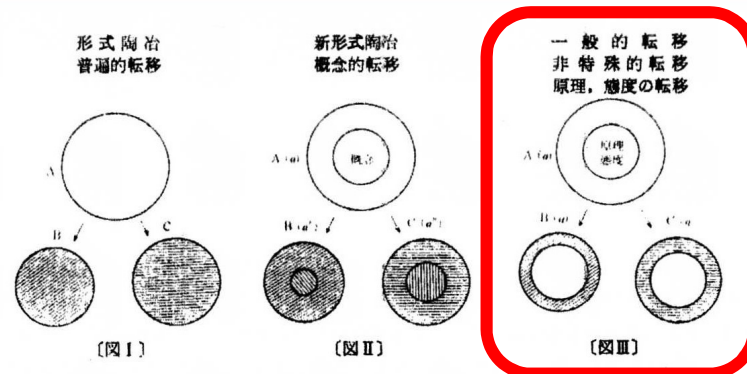
ブルナーは、書籍「The Process of Education (1961) 教育の過程」*において、「構造」概念に基づき、新しい転移の可能性を主張したのです。同書で、彼は2つの転移を区別しています。一つは、訓練の特殊転移 (Specific transfer of training) であり、これは、ソーンダイクを始めとした行動主義心理学が扱ってきた転移です。もう一つの転移は、非特殊転移 (Nonspecific transfer) という「原理や態度の転移」であり、この第二の転移が生じるのは、学習者が教科の構造を習得した時だと、ブルナーは考えました。ブルナーは、「前の学習が後の学習をより能率的にやらせる第二の方法は、便宜的に非特殊転移、もっと正確に言えば、原理や態度の転移と呼ばれているものを通ることである」(Bruner, 1960) と述べています。

このように、1960年頃から、実質陶冶から形式陶冶への回帰現象が見られ、この二元論の見直しがされるようになりました。特殊転移 (Specific transfer) 説は、前から実質陶冶論と並行して認められていたのですが、もう一歩進んで、一般的転移 (General transfer) の可能性も認めるようになったのです。

*ブルナーは「教育の過程 (1961)」で、教科の「構造」を中心において、学習者の洞察や発見を促していく「螺旋型」のカリキュラムを提唱しました。これが「教育の現代化」運動の始まりとなったのです。
(佐伯 (1998) 学習の「転移」から学ぶ～転移の心理学から心理学の転移へ。『心理学と教育実践の間』佐伯・宮崎・佐藤・石黒。)

「転移の間の関連性」

M M M T



佐藤(1979)は、5段階に分けて、
転移の間の関連性を図式化しました。

(佐藤三郎(1979)教育方法
吉田・長尾・柴田編 有斐閣双書.)

- 1) プラトン、ロックによる形式陶冶説
- 2) ソーンダイク(1901)による転移研究
- 3) フレイシュマン(1953)による企業における研修転移研究

同じ「転移」とは言っても・・・

M M M T

●教育学における「学習転移 Transfer of Learning」

学校 → 社会（形式陶冶・遠転移）

●企業研修における「研修転移 Transfer of Training」

研修 → 職場（実質陶冶・近転移）
(Knowing) (Doing)

- 1) プラトン、ロックによる形式陶冶説
- 2) ソーンダイク(1901)による転移研究
- 3) フレイシュマン(1953)による企業における研修転移研究

MMMT: Monday Morning Manabi Time!

1. オープニング(導入)

2. ボディ(本論)

- 研修転移
- 研修評価
- OJT 等

3. クロージング(結び)

MMMT: Monday Morning Manabi Time!

